

はじめに

「モノより人とかかわる仕事がしたい」。学生時代、私はそう考え学校の先生になろうと決めました。自分自身の学校生活が楽しかったことに加え、信頼できる先生に出会えたことも影響していたと思います。

ただ、障害児教育のことは一切頭にありませんでした。大学でも障害児教育について学ぶことはなく、教員採用試験のときは希望さえしていませんでした。

普通高校で数学の面白さを伝えられたらなあと思っていたのですが、面接の話がきたのは思いがけず障害児学校（知的障害）からだったのです。そのときの校長とのやりとりです。

「君の大学での卒論のテーマは？」

「はい、『レンズ空間におけるブリッジ分解の考察』です」

「君が大学で勉強したことは、この世界では一切役に立たないかもしれないけど、それでもいいかい？」

「はい！ いいです！」

迷うことなく即答できたのは、校内を案内されたときに出会った子どもたちを「かわいい」

と感じたから。ただそれだけでした。

こうして私は障害児学校の先生になりました。

障害児教育のことも福祉のこともまったく知らないままのスタートでした。知的障害の子どもたちとどうかかわればいいのか？ とりあえず子どもの方へ反射的に反応するような行き当たりばつりのかわりだったと思います。歌が好きなお子にはリクエストに応じてひたすら歌い、絵が好きなお子とは毎日お絵かきをしました。（目の前の子どもがどうすれば笑ってくれるかなあ）という思いだけでした。ただ、それだけではうまくいくはずもなく、授業を嫌がる子、パニックになった子の気持ちがわからずオロオロする日々が続きました。

教員2年目に受け持った昌樹君（自閉症、知的障害、高一）には、今も申し訳ない気持ちしかありません。彼が入所していた施設でのカンファレンスでのことです。

「彼は時々言葉を発しますよね」

「そうそう、それに歌を歌うときもありますよね」

施設職員と先輩教師の間で話が盛り上がる中、私だけが（えっ、言葉？ 歌？）とついでいけませんでした。私には昌樹君が発する「オワワ〜。ピュピュッ」などの声は「意味のない音」としてしか聞こえていなかったのです。あのときの身の縮む思いといたら例えようもあ

りません。

今まで気づかなかっただけで、きっと私に思いをわかってもらえずパニックになってしまったこともあるんだろうなと気持ちが落ち込みました。

しかし、いくら焦っても昌樹君の気持ちをつかむことはできず、悶々とした日々が過ぎていきました。この頃の私は、彼とのかかわりに自信がもてず、心が萎縮してしまっていたと思います。

そして、ある日、また昌樹君が泣き叫びながら自分の頭を叩き始めてしまいました。興奮状態がおさまった後もさめざめと泣きながら横たわる昌樹君に、私はどう接すればいいのかわからぬまま、ただそばに座っていることしかできませんでした。

するとそのときです。ようやく落ち着きを取り戻した昌樹君がニコニコしながら私の頬に唇を寄せてきたのです。

（もう大丈夫。そばにいてくれてありがとう）

何もできていない私にそう言ってくれているようで胸が熱くなりました。こんな自分にも、パニックから立ち直るまで付き合ってくれたことに親愛の情を示してくれるのか。だったら、どんなに時間がかかってもいい、パニックになったときは、ちゃんと落ち着くまでそばにしようとお心に決めました。そして、いつか昌樹君の気持ちをしっかりと汲み取れるようになりたいとようやく前向きになることができました。

